

がんで子どもを亡くした母親への質問調査結果の検討 —自由記述の収集と分類—

新山悦子^{*1} 梶原京子^{*1} 忠津佐和代^{*1}

はじめに

近年、死の病院化、核家族化が進み、青年が現実の死に接する機会が少なくなっている。一方、幼少時よりテレビやゲーム、インターネットで死を遊びとして経験することが多く、命を軽視する傾向があることが指摘されている。このような背景の中、学校現場において生徒に真摯に死を考えることを教える教育の必要性や重要性が叫ばれている。この教育は、特に死にゆく人や死に直面した人をケアする職業を希望する青年期の学生にとって、対象者の命の重みを学習し、理解力や共感力を高める重要な教育の1つである。しかし、この教育前後における学生の意識の変化や感想に焦点を当てた報告はある¹⁾が、教育を受ける前に学生が何を知りたいと考えているのかを報告した研究は少ない。中西²⁾は、「対象の現実に目をつぶった教育は何も生み出さない」と指摘しており、まず真摯に死を考えることを教える前に、対象である学生が何を知りたいとしているのかを明らかにすることが重要である。

今回、がんで子どもを亡くした母親の経験を聞く機会を得た。がん患者の家族の多くは、患者と共に闘い、様々な困難を乗り越えている。特に患者が小児の場合、患者以上のストレスを感じている場合も少なくないだろう。キューブラー・ロス³⁾は「家族のことも合わせて考えなければ、本当に有意義なかたちで末期患者の力になることはできない。闘病中、家族は重要な役割を果たし、彼らの言動は、病気に対する患者の姿勢に大きく影響する」と述べており、患者に対するケアの質の向上のためにも家族ケアは重要である。従って家族ケアに関わる可能性が高い職業に就く学生には、その理解を深める教育が必要である。そのために彼らを教育する立場の者にとって、彼らの理解のあり様を知ることが重要である。

本研究の目的は、養護教諭の資格取得を希望する学生が、病死した子どもをもつ母親に何を聞きたいかを構造的に明らかにし、がんで子どもを亡くした

母親の経験を積極的に聴くことができるよう、サポートするための示唆を得ることであった。

対象と方法

1. 対象と時期

対象者は、養護教諭の資格取得を希望するA大学学生131名(保健看護学専攻79名,健康体育学専攻36名,その他9名,不明4名)で、非該当者を除いた120名(有効回答率91.6%,平均年齢21.26±1.78歳,男性11名,女性109名)であった。

調査実施時期は、2004年6月29日~2004年7月12日であった。

2. 調査方法

がんで子どもを亡くした母親に聞きたいことを含む、自記式質問紙調査を行った。調査方法は、まず調査者が養護教諭の資格取得を希望している学生に対し、授業終了後に翌週、がんで子どもを亡くした母親に講演をしてもらうことを説明した。その後、質問紙および調査への協力依頼をした。倫理的配慮については、回答は無記名、かつ自由意志であり、回答しなくても回答者が不利益を被らないこと、回答の途中で止めてもよいこと、結果は授業評価には反映しないこと、プライバシーは保護されること、本調査結果を研究的に分析すること、質問紙は研究終了後に調査者が責任をもって破棄すること等を口頭と文書で説明した。回収は、調査者が直接行った。

3. 調査内容

- ・ 基本的属性(年齢,性別,学科)
- ・ がんで子どもを亡くした母親に聞きたいことや教えてほしいことがあれば書いてください(自由記述)

4. 分析方法

養護教諭を目指す学生への質問事項は、過去の学生の経験や環境に基づいた個性的で複合的な性格の

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科
(連絡先)新山悦子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

ものであるため、データ分析はKJ法を用い、その手順に従って分析し、図解化した。KJ法は、先入観や仮説、理論、希望的観測に合わせたものではなく、渾沌それ自体に語らせ、渾沌から秩序を作り、多様性を持つ現象に存在する主要要素や出来事とその概念間の関連を明らかにし、データに根ざした新たな発想や見解を展開することを目的としている⁴⁻⁶⁾。従ってKJ法は、現代の学生の聞きたい、知りたいと思っていることを構造的に理解し、今後の養護教育における意味を見いだすのに有効であると考えられる。

分析は、以下の手順で行った。質問紙の回答を抽出し、意味上の文節に区切ってラベルに転記した。意味内容の類似性によってラベルを集め、その集合したラベルの本質が明らかになるまで内容を読み返し統合するという一連の作業を繰り返した。次に、導き出されたカテゴリー、サブカテゴリーを意味上の相互関係性により空間配置し、関係を線で結びつけ図解化した。文章化の第一段階として、カテゴリー毎にがんで子どもを亡くした母親への質問事項を説明し、第二段階として図解を基盤に質問事項を検討した。また意味内容に疑問が生じたときは、質問紙の回答を繰り返し検討した。分析の全過程は、授業担当者(養護教諭経験者)、看護学専攻の研究者2名で行い、スーパーバイザーから指導を受けた。カテゴリー化、文章化、図解化は、研究者間とスーパーバイザーの判断と解釈が一致するまで突き合わせを行った。最終的に明らかになったカテゴリー名や研究結果が妥当であることを確認した。

結 果

1. 質問項目の構造

質問紙の自由記述から「子どもの死をどのようにして受け止められてきたのか」「看護師の声かけで、傷ついた言葉について聞きたい」「子どもの闘病中、何を支えにどのように頑張ったか」などの65枚のラベルが抽出された。そして以下のような設問項目の構造を得たため、各カテゴリーに分けて分析結果を述べる。

2. がんで子どもを亡くした母親への質問事項

がんで子どもを亡くした母親への質問事項は、3カテゴリー、10サブカテゴリーに統合することが妥当と考えられた(図1)。以下、カテゴリー:【 】, サブカテゴリー:《 》で示す。

A.【死にゆく子どもの看病時や死別後の家族固有の苦悩の変遷を知りたい】は、a.《症状の発現・告知・子どもの死に遭遇した時の親の気持ちを共感

的に理解したい》b.《死にゆく子どもと向き合い、看病している親の苦悩を理解したい》c.《苦悩、諦めから死の受容への変遷のプロセスを知りたい》d.《子どもを亡くし、受容に至った現在の心境を知りたい》、B.【親固有の苦悩を共感的に理解し、援助者としての対応技術を知りたい】は、a.《死の看取りの時に医療者を含め、周りの接し方を知りたい》b.《看護師の声かけの適・不適の言葉を知りたい》c.《養護教諭の関わり方について知りたい》、C.【臨終の時を迎えるにあたり、親子各々がどのような時を過ごせたらよかったのか聞きたい】は、a.《先に逝った子どもを想い、今も辛くなることもあるのか知りたい》b.《現在のありのままの気持ちを知りたい》c.《子どもとの関係で一番つらかったことは何か》から構成されていた。さらにデータの中から象徴的な事項を引用し、各カテゴリーについて文章化した。

1) 【A. 死にゆく子どもの看病時や死別後の家族固有の苦悩の変遷を知りたい】

学生は、《症状の発現・告知・子どもの死に遭遇した時の親の気持ちを共感的に理解したい》、《死にゆく子どもと向き合い、看病している親の苦悩を理解したい》、《苦悩、諦めから死の受容への変遷のプロセスを知りたい》、《子どもを亡くし、受容に至った現在の心境を知りたい》と想っていたと推測される。学生は、小さな子どもにがんの症状が出現し、検査結果の説明を受けた時、がんと闘病生活についての想像や死に対する予期悲嘆など、家族に未確定の漠然とした不安が広がることを理解していたと推測される。

学生は、医師にがんであることを告知された家族は、いったいどのような気持ちになるのか知りたいと思っていたと推測される。がんは死を免れ得ない、苦痛を伴う病気であるといったイメージの強い疾患であり、さらに自分よりも先に子どもが死ぬであろうといったつらい現実と直面させられることで、家族は計り知れない心理的な衝撃を受けることを理解していたと推測される。

学生は、がんへの罹患という辛い現実を受け止め、様々な不安や葛藤を抱えながら死にゆく子どもを看病している家族の気持ちを専門職として知りたいと思っていたと推測される。つらい検査や治療などで苦しむ様子を目の当たりにし、子どもが死ぬかもしれないといった恐怖や不安の中、家族も患者と同様に苦しむということを理解していたと推測される。

学生は、家族が治ることを信じて一緒に闘ってきた長い日々が終わり、子どもの死に直面した時の気

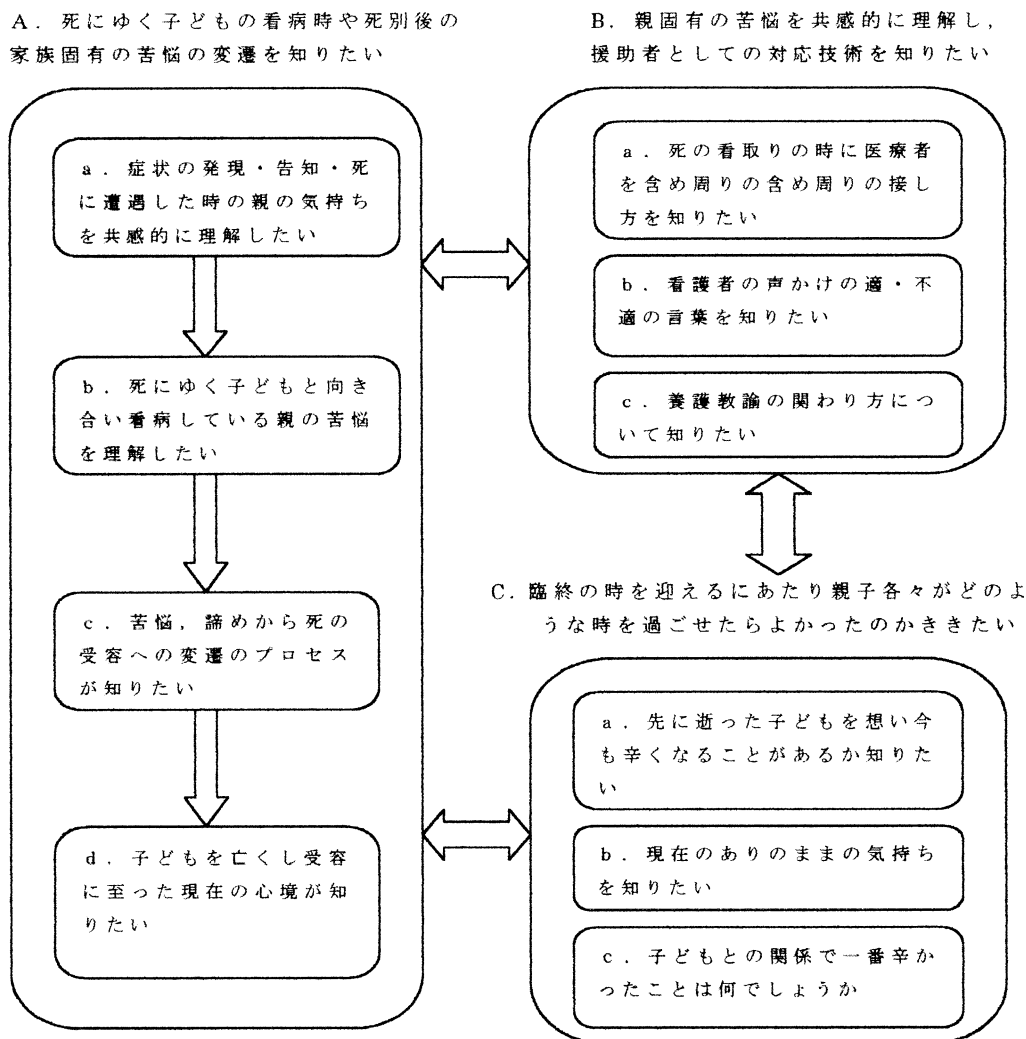


図1 母親への質問調査統合結果(図中の記号 ⇒ 因果関係あり ↔ 相互に関係あり)

持ちを知りたかったと推測される。現実の死に直面し、家族が危機的状況に陥ることを理解していたと推測される。

学生は、がんで子どもを亡くした母親が、受容するまでどの位の時間が必要であったのか、子どもの死を受容するにはどのようなプロセスがあったのかといった《苦悩、諦めから死の受容への変遷のプロセスを知りたい》と思っていたと推測される。さらに子どもの死という辛い体験を通して家族の生き方が変化することを理解していたと推測される。

学生は、子どもの死を乗り越えても思い出して辛くなることもあるのだろうか、亡くなった子どもと同年齢の人の姿を見るとらし合せて考え辛くなることはないのだろうかといった《子どもを亡くし、受容に至った現在の心境を知りたい》と思っていたと推測される。愛するわが子を失った母親の苦痛とは、何をもってしても補うことができない絶対的な喪失と交換不能性にあり、悲哀の感情に捉われ続け

たままで、次のステップに進めない。母親はそのような超克できない苦悩を背負っている。学生は、そのような母親の状況を理解していると推測することができる。

2) 【B. 親固有の苦悩を共感的に理解し、援助者としての対応技術を知りたい】

学生は、将来自分が養護教諭になった時、死に直面している子どもと家族にどのようなかかわり方をしていっていいか、また養護教諭として何が求められ、何ができるのか《養護教諭の関わり方について知りたい》と思っていたと推測される。患者が院内学級に転校しても、養護教諭としてかかわりを持ち続け、患者と家族を支え続けていくことの必要性を理解していたと推測される。

また学生は、自分たちが臨床で看護師として働く時や臨床実習でどのような声かけをしたらいいのか、うれしかった言葉、傷ついた言葉について聞きたい

とっており、より良い看護をしていくために《看護師の声かけの適・不適の言葉を知りたい》《死の看取りの時に医療者を含め周りの接し方を知りたい》とっていたと推測される。看護師の言葉や態度1つで家族がうれしかったり励まされたり辛かったりする、自分たちの与える影響の大きさ、より良い人的環境の重要性について理解していたと推測される。

3)【C.臨終の時を迎えるにあたり、親子各々がどのような時を過ごせたらよかったのか聞きたい】

学生は、子どもはどんなことをしたいと望んだか、がんと告知された時、子どもの延命と最後を好きなことをして過ごすのとどちらを考えたのか、という【臨終の時を迎えるにあたり、親子各々がどのような時を過ごせたらよかったのか聞きたい】とっていたと推測される。死を迎える子どもや家族がどのような希望を持っているのかを知り、その希望を叶えることは、家族が子どもの死を受容するのに必要なことであると理解していたと推測される。

学生は、《先に逝った子どもを思い、今も辛くなることがありますか》《子どもとの関係で一番良かったことは何か》といった《現在のありのままの気持ちを知りたい》とっていたと推測される。家族は、子どもが亡くなると学校や病院との関わりが少なくなるが、その後も子どもを亡くした親のケアが必要であることを理解していたと推測される。

考 察

本研究の目的は、養護教諭を目指す青年期の学生達が、がんで子どもを亡くした母親に聞きたいこと、教えてほしいことを構造的に明らかにし、がんで子どもを亡くした母親の講演を積極的に聴くことができるようサポートするための示唆を得ることであった。

KJ法に基づく分類の結果、がんで子どもを亡くした母親の「死にゆく子どもの看病時や死別後の家族固有の苦悩の変遷を知りたい」「親固有の苦悩を共感的に理解し、援助者としての対応技術を知りたい」「臨終の時を迎えるにあたり、親子各々がどのような時を過ごせたらよかったのか聞きたい」と思っていることが明らかになったと推測される。以下、主なカテゴリーについて考察する。

1.【A.死にゆく子どもの看病時や死別後の家族固有の苦悩の変遷を知りたい】について

図1に示すように、症状発現、告知、子どもの死に遭遇した時、死にゆく子どもと向き合い、看病し

ている時、子どもの死後、現在までの母親や家族の気持ち、受容プロセス、生き方の変化を知りたいという気持ちから構成されていた。さらに構造的に見ると、図1の関係性に示されるように、死にゆく子どもの看病時や死別後の家族の気持ちが臨終にいたる看護、養護教諭の声かけ、接し方、親子の希望と相互作用していることを理解していたと考えられる。学生は症状が発現してから、子どもの死後、気持ちのけじめがつくまで、時間の経過にそって死にゆく子どもと家族、特に母親は、どのような気持ちでいるのかを知り、希望にそったケアをしたいとっていたと考えられる。さらに死を受容するためには、養護教諭や看護師との関わり方が大きく影響するというより良い人的環境の重要性を理解していたと考えられる。

養護教諭は学校において、がんで発症する前から子どもと関わりを持っているが、症状が発現してからは心身ともにケアをし、他の生徒や教員、家族等の調整(リエゾン)的役割を担うことになる。その時にがんの子どもを持つ家族の気持ちを知り、適切なケアを提供したいという前向きな意識が明らかとなった。また今回は看護学生が健康体育学専攻の学生よりも多く、その中で臨床実習を経験している学生もおり、家族の気持ちを知り、適切な看護をしたいと思っていることが明らかになったと考える。

本研究において学生が知りたいことは、がんで死にゆく子どもとその家族との精神心理的な関わりのみならず、子どもを亡くした親だけにしかわからない苦悩の本質、実存的苦悩の理解とそれに基づいたアプローチの方法であることが明らかとなった。特にターミナル期にある子どもの家族は、死を恐れ、その可能性を恐れて治療の期間を過ごすことが多い⁷⁾。長谷川は⁸⁾、「悲しみに伴う怒りや後悔や葛藤を思いっきり表出できること、それを周りの人々が許してくれることが悲嘆からの回復にはとても重要なのである」と述べている。精神的に援助を必要としている親には、いつでも気持ちを表出させることができるように自己研鑽を積み、常に気持ちの準備をしておくことが必要であると考える。

2.【B.親固有の苦悩を共感的に理解し、援助者としての対応技術を知りたい】について

「死の看取りの時に医療者を含め、周りの接し方を知りたい」「看護師の声かけの適・不適の言葉を知りたい」といった看護師としての家族に対するケアのあり方、「養護教諭との関わり方について知りたい」といった養護教諭として家族に対するケアのあり方の2つのサブカテゴリーから成っていた。さら

に構造的に見ると(図1),臨終にいたる看護,養護教諭の声かけ,接し方は,死にゆく子どもの看病時や死別後の家族の思いと親子の希望と相互作用をしていると理解していたと考えられる。この結果は上記でも述べたように,看護学生が健康体育学専攻の学生よりも多かったことが影響していると考えられる。

学生は,養護教諭や看護師になった時に,どのような援助が望まれるのかを具体的に知りたいと思っていることが明らかとなった。岩瀬・茶園⁹⁾は,終末期看護実習において学生が体験した戸惑いを感じた場面を調査し,「家族が悲しみの気持ちを表現したとき」あるいは「つらそうな家族の様子をみて「接し方がわからなかったとき」に戸惑いを感じていることを明らかにしている。今回の調査でも,同じような戸惑いを感じている学生がいることが明らかになったと考える。

また自分達はサポートシステムの一員であり,言動や接し方が患者や家族に与える影響の大きさを理解していたことが明らかとなったと考える。さらに悲嘆にくれている家族に少しでも精神的,心理的ケアをしたい,しかしそれにはどのような接し方,声かけをしたらいいのかといった不安があることが明らかになった。山崎¹⁾は,心理的な援助を行うために,自分の心を育てていくことの必要性を述べている。今後,学生の死生観の確立や他者の多様な死生観の理解,共感性を高める教育等が必要であると考えられる。

3.【C.臨終の時を迎えるにあたり,親子各々がどのような時を過ごせたらよかったのか聞きたい】について

構造的に見ると(図1),親子の希望は,死にゆく子どもの看病時や死別後の家族の気持ちと臨終に至る看護,養護教諭の声かけ,接し方との相互作用を理解していたと考える。

また学生は,対象者であるがんの子どもと親の生きている意味を充実させるような援助をしたいと思っていることが明らかになったと考えられる。

これは,がんの子どもの運命を共に引き受け,健気に闘っている家族の苦悩に対して,より本質的な

精神的支援をしたいという,学生の意識が伺える。教員は,このような学生の意識を臨床で生かせるような教育的働きかけをしていかなければならない。

さらに症状発現からターミナル期,退院後もケアが必要であり,連続した看護を教育する必要がある。養護教諭や看護師は,子どもが亡くなるとその後の母親のフォローはほとんどできていないのが現状だろう。世界保健機関(WHO)によると,緩和ケアの要素として「患者と死別した後も,家族の苦悩への対処を支援する体制をとること」と遺族ケアの重要性を明示している。しかし遺族ケアサービスは,一部のサポートグループのみが行っているのが現状である。今後,学校や病院内で看護者が関わっている間だけのケアではなく,対象者を全人的に捉えられる教育が必要である。

おわりに

本研究の目的は,養護教諭を目指す青年期の学生達が,がんで子どもを亡くした母親に聞きたいこと,母親から教わりたいことを構造的に明らかにすることであった。KJ法に基づく分類の結果,「死にゆく子どもの看病時や死別後の家族固有の苦悩の変遷を知りたい」「親固有の苦悩を共感的に理解し,援助者としての対応技術を知りたい」「臨終の時を迎えるにあたり,親子各々がどのような時を過ごせたらよかったのか聞きたい」の3カテゴリーが見出され,各々のカテゴリーの相互作用を理解していると推測された。

以上の事から養護教育における死の準備教育には,アルフォンス・デーケン¹⁰⁾が述べている,専門知識の伝達のレベル(知識のレベル),価値の解明のレベル(価値観のレベル),感情的・情動的な死との対決のレベル(感情のレベル),技術の習得(スキル・トレーニング)のレベル(技術のレベル)のうち,知識のレベルである講義と技術のレベルである実習以外に,本人固有の苦悩の意味解明と,本人自身の感じ方に沿った理解をするために価値観・感情のレベルに相当する教育が必要であると考えられた。

文 献

- 1) 山崎裕二:看護・医療系短大等における「死の教育学」の実践(1)―「死に関する看護・医療系学生の意識調査」の授業への導入―。日本赤十字武蔵野短期大学紀要,15,89-96,2002。
- 2) 中西睦子:はしがき。臨床教育論 体験からことばへ,初版,ゆみる出版,東京,ii,1983。
- 3) E・キューブラー・ロス:患者の家族。鈴木晶訳,死ぬ瞬間 死とその過程について,第1版,読売新聞社,東京,231,1998。

- 4) 川喜田二郎：KJ法，中央公論社，東京，10-20，121-170，1991。
- 5) 川喜田二郎：発想法，中公新書，東京，4-32，1993。
- 6) 舟島なをみ：質的研究への挑戦，医学書院，東京，24-31，84-97，1999。
- 7) 田原幸子：予後不良な子どもの家族への精神的援助．小児看護，23(4)，472-474，2000。
- 8) 長谷川浩：悲嘆援助と行動科学．日本保健科学学会年報，メジカルフレンド社，53，2000。
- 9) 岩瀬恵美，茶園美香：終末期看護実習における学生の戸惑いの実態と指導上の課題．死の臨床 第26回日本死の臨床研究会プログラム・予稿集，25(2)，155，2002。
- 10) A・デーケン：死への準備教育．死を教える，第1版，メジカルフレンド社，3，1986。

(平成16年11月30日受理)

**A Review of the Results of a Questionnaire Survey Given to a Mother
Who Lost Her Child to Cancer
—Collection and a Classification of Free Description—**

Etsuko NIIYAMA, Kyoko KAJIWARA and Sawayo TADATSU

(Accepted Nov. 30, 2004)

Key words : acceptance of child's death, feelings of families, psychological support

Correspondence to : Etsuko NIIYAMA

Department of Nursing, Faculty of Medical Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.14, No.2, 2005 389-394)